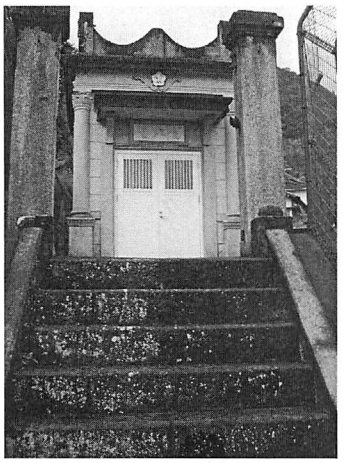
朝見浄水場（詳報）

外山健一

明治三十八年八月、別府町長日名子太郎が「上水道敷設工事企画」を町会議に諮問し同意を得る。明治三十九年四月一日、別府町・浜脇町対等合併、別府町初代町長に日名子太郎が就任（明治三十九年七月十日）するや、合併前の「上水道敷設工事企画」を推し進める。同年八月、町会議員八人を水道調査委員に任命し先進地（東京・熱海・大阪・神戸・岡山・下関）の視察を行う。

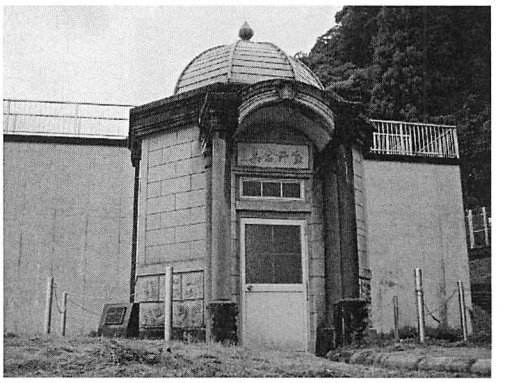
第二代町長吉田嘉一郎の下、設計が行われた。大阪市水道局の工学博士小林泰蔵を工事顧問に、大阪市水道局技師大塚藤十郎を工事部長として採用、さらに大阪市水道局技手石崎貞二郎を採用し、近代的な浄水場諸施設の設計を行った。



量水室

大正二年七月十一日事業認可を得る。

第三代別府町長磯沖菊蔵によって、大正三年七月二十六日朝見浄水場起工、大正六年三月三十一日完成（総事業費三六二、一四〇円）。同六年四月一日供用開始。全国で三十七番目の快挙であった。



集合井室

施設内容は乙原貯水ダムを水源として濾過池三箇所、配水池二箇所、一日の給水量二、八〇〇トン（小学校用プール十一杯分）、給水人口二五、〇〇〇人であった。当時旅館が約三百軒あったが、一般家庭は井戸水を使用していたことから、お金を出してまでして水を買う事に抵抗があり、当初事業運営は苦しかった。

大正六年に造られた「集合井室」、「配水池」（レンガ積）、「配水池北入口」、「配水池南入口」、「量水室」＝（朝見神社駐車場入口）の五施設は近代化遺産として、平成九年「国登録有

形文化財」となった。

「量水室」はギリシャ風の神殿を偲ばせる鉄筋コンクリート造りの建物でコリント式の円柱をもち、正面に量水室と刻まれ、また別府町水道事務所のマークが掲げられている。

朝見浄水場内の「集合井室」は鉄筋コンクリート造人造石仕上げで、ドーム状の屋根をもつクラシックスタイルである。建造物はいずれもディーティルズ（細部）に大正ロマンを感じさせるデザインがほどこされている。

その後、人口増加に併せ、拡張工事を繰り返し実施したが、現在のような状態になったのは、昭和四十二年に実施された第六期拡張事業である。

戦後から昭和四十年頃までは、別府市は慢性的な水不足の状態であった。これを解消する事が市政の急務であり、大分川からの取水を模索していた。その頃新産都指定と国体開催を見据えて、大分県企業局による別府発電所設置計画案が浮上した。これに便乗、発電所の余り水を朝見浄水場に取水する事となり、昭和四十二年に第六期拡張事業として完成した。大分川から約二十一キロメートルの距離を、水路とトンネルで別府朝見まで水を引くという大事業である。

大分川沿いの久大線湯の平駅の大分寄りから元治（げんじ）水路（一八六四年）井路を利用するもので大分川取水口から小狭間川取水口まで一二、八四四メートルを水路、これより別府発電所までの七、九二一メートルをトンネルで送水するものである。総延長は二〇、七六五メートルである。なお別府発電所手前の配管の直径一・三メートル、管末は一メートルで発電力は一、五〇〇KWである。

この発電の余り水約五〇、〇〇〇トンを朝見浄水場に取り入れ、別府市全体七六、六八〇トンのうち約七五パーセントの五一、八四〇トンを浄水して家庭に配水している。この事業にかかる別府市の負担金は約十九億円であった。

現在、別府市全体で十八水源（大分川取水・乙原貯水ダム・鮎返ダム・地下水など）を有し安定供給を維持している。

（参考）鮎返ダムは、終戦後、占領軍用に築造したダムで、占領軍撤退後、国から無償で払い下げされた。

配水池